

観光を基幹産業に

なぜ日本を訪れる外国人観光客が急増しているのか。
さらに来てもらうために必要なこととは。
田村明比古 前・観光庁長官に聞いた。

前・観光庁長官
田村明比古さん



目覚ましいアジア中間層の拡大

——なぜこれほど日本を訪れる人が増えたのでしょうか。

背景にあるのは、アジアを中心に新興国、途上国の経済が成長して海外旅行ができる中間層が増えたことです。通常、1人当たりGDPが5千ドル(約55万円)を超えたあたりから海外旅行する人が大きく増え始め、1万ドル(約110万円)になると本格化すると言われていました。日本や韓国がそうでした。現在、中国が9千ドル近くまでできています。

そうした中、12年に現政権になってから近隣国を中心に戦略的にビザ要件を緩和した効果は大きかったです。また、急速に普及したLCC(格安航空)の就航を促進したことで、アジア各国から日本が身近になりました。さらに、Wi-Fiなど通信環境を整えることで、SNSで日本の良さが伝わるようになった。口コミの力は大きいですね。

タテ割りをやめて大胆な施策で

——政府は20年に4千万人という目標を掲げています。

当初は2千万人が目標だったのですが、達成を大幅に前倒しできるめどが立ったため、15年に「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」を立ち上げ、16年3月に4千万人に目標を引き上げたという経緯があります。総理を議長に閣僚会

議を行い、タテ割りをやめて政府全体で取り組むことで、各省庁が思い切った大胆な施策を打ち出せるようになりました。

改革には3つの視点で取り組んでいて、第1に観光資源の魅力の向上。文化財や国立公園も保存と保護だけでは宝の持ち腐れになってしまいます。古民家や古い商店街も。素材はたくさんあるが活用されていない。これらの観光資源を旅行者視点で発掘し活用できるようにしているところです。

第2に観光産業の国際競争力の強化。これまでは、国内市場だけを相手にしていれば良かったのですが、インバウンドは諸外国と競争するわけですから、今までのような低い生産性、ガラパゴス化した商慣行などを改めていかなくてはなりません。さらに、人材育成。大学の観光学科は、日本人の海外旅行、アウトバウンド全盛期にできたものが多いのですが、これからは観光関連企業や地域をマネジメントできる人材が必要です。今年度から一橋大学と京都大学に観光MBAコースが新設されました。

第3に、ストレスフリーな旅行環境をつくり、どんな人でも楽しめるようにすることです。

様々な立場の人々が活躍できる

——すそ野が広く経済効果が大きそうですね。

訪日外国人による旅行消費額は昨年、約4.4兆円でした。宿泊業、小売業はじめインバウンド関連の投資も大きく増えています。買い物需要は、